

作物名 にんじん

項目	実施のポイント	備考
黒葉枯病	発病初期から10日間隔の薬剤散布。	輪作を実施する。肥料切れしないように注意する。
ネキリムシ類	加害初期の毒餌処理。	
ヨトウガ	加害初期の薬剤散布。	

作物名 だいこん

項目	実施のポイント	備考
軟腐病	播種25～30日後以降の薬剤散布。	多窒素栽培を避ける。抵抗性品種を選択する。
タネバエ	播種時の薬剤播溝施用。	有機質肥料の施用を避ける。未熟有機質は十分分解してから播種する。
キスビトハムシ	播種時の薬剤播溝施用。	幼虫被害は、発芽3週間以降から発生する。
コナガ	移植時の苗床かん注、粒剤施用。薬剤散布。	合成ピレスロイド、IGR剤では抵抗性個体群が確認されている。
ヨトウガ	加害初期の薬剤散布。	コナガとの同時防除。老令幼虫は薬剤に対する抵抗性が大きくなる。
アブラムシ類	播種時の薬剤播溝施用。薬剤散布。光反射性フィルムを用いたマルチ栽培	光反射マルチの効果は、は種後30日前後で低下してくる。

作物名 キャベツ

項目	実施のポイント	備考
軟腐病	結球初期からの薬剤散布。	ほ場の排水をよくし、連作を避ける。
菌核病	結球初期からの薬剤散布。	
コナガ	移植時の苗床かん注、粒剤施用。薬剤散布。	合成ピレスロイド、IGR剤では抵抗性個体群が確認されている。
モンシロチョウ	薬剤散布。	コナガとの同時防除。
ヨトウガ	加害初期の薬剤散布。	コナガとの同時防除。老令幼虫は薬剤に対する抵抗性が大きくなる。
アブラムシ類	発生初期の薬剤散布。	通常はコナガ等との同時防除。多発時には食葉性害虫とは別に薬剤を選択する。

作物名 かぼちゃ

項目	実施のポイント	備考
うどんこ病	薬剤散布。	茎葉の繁茂を避けるため、多肥・密植栽培を避ける。
ワタアブラムシ	発生初期からの薬剤散布。	

作物名 アスパラガス

項目	実施のポイント	備考
斑点病	収穫終了時および養成畑の薬剤散布。	地上部枯ちよう後の茎葉は、地際から低刈りして処分する。
茎枯病	収穫終了時および養成畑の薬剤散布。	地上部枯ちよう後の茎葉は、地際から低刈りして処分する。
クビボソハムシ	薬剤散布。	春季の成虫だけでなく、収穫打ち切り後の幼虫防除も行う。
ヨトウガ	発生初期の薬剤散布。	

作物名 スイートコーン

項目	実施のポイント	備考
アブラムシ類	雄穂抽出期以降の薬剤散布。	
アワノメイガ	7月中旬～8月中旬の薬剤散布。	晩秋あるいは翌春に茎部を処分して越年幼虫密度の低減を図る。

作物名 さやいんげん

項目	実施のポイント	備考
立枯病	播種前の薬剤種子粉衣。	
灰色かび病	開花始後の薬剤散布。	連作や多肥栽培を避ける。
さび病	7月上旬～8月中旬の薬剤散布。	
タネバエ	播種前の薬剤種子粉衣。播種時に粒剤を播き溝施用する。	有機物は前年秋に施用する。当年春の未熟有機物施用を避ける。
ハダニ類	発生初期の薬剤散布。	
アザミウマ類	発生初期の薬剤散布。	
アブラムシ類	播種時の播溝施用。発芽後の薬剤散布。	春季が高温ぎみに経過した場合には、有翅虫が早・多飛来するので注意す

作物名 ねぎ

項目	実施のポイント	備考
さび病	発生初期からの薬剤散布。	
べと病	発生初期からの薬剤散布。	前年多発ほ場では予防散布を実施する。
黒斑病	発生初期からの薬剤散布。	
タマネギバエ	定植時粒剤施用。	有機物は前年秋に施用する。当年春の未熟有機物施用を避ける。
ネギアザミウマ	発生初期からの薬剤散布。	

### 施設野菜

施設栽培においては、土盛りやビニール被覆により、適正な土壌水分管理が実施されれば、排水不良に起因する病害虫多発の危険は回避される。施設野菜においても、適正な輪作を行うことは基本である。同一作物を連作すれば、メロンのつる割病など土壌病害の多発を招くので注意が必要である。

以下に、各種作物の常発病害虫について、その対応法を示す。

作物名 トマト

項目	実施のポイント	備考
灰色かび病	薬剤散布・くん煙処理。密植を避け、換気をよくする。被害葉・被害果を除去する。	シカルホキシミド系剤、シエトフェンカルブ・チオファネートメチル剤耐性菌が確認されているので、ローテーション散布を実施する。
葉かび病	薬剤散布。	密植を避け、加湿にならないよう灌水・換気に注意する。抵抗性品種を栽培する。
オンツツコナシラミ	薬剤散布。	前作物の栽培終了後、茎葉と雑草を完全に除去する。コナシラミの寄生していない苗を移植する。
アブラムシ類	植付時粒剤処理。薬剤散布。発生初期のくん煙処理。	
ナミハダニ	発生初期の薬剤散布。	
アザミウマ類	薬剤散布。	前作物の栽培終了後、茎葉と雑草を完全に除去する。寄生していない苗を移植する。

作物名 ほうれんそう

項目	実施のポイント	備考
べと病	生育初期の薬剤散布。抵抗性品種を栽培する。	夜間の多湿条件は発病を助長する。
萎凋病	は種前の土壌消毒。紫外線除去フィルムを被覆に用いる。太陽熱利用による土壌消毒。	
コナダニ	は種前の薬剤の土壌混和。2葉期頃の薬剤散布。	収穫後、ほ場に取り残しや残さを残さないようにいねいに取り除く。
ヨトウガ	発生初期の薬剤散布。	

作物名 メロン

項目	実施のポイント	備考
半身萎凋病	定植前の土壌処理。	病原菌密度を低下させた上で、抵抗性品種・台木を用いることが望ましい。
斑点細菌病	7月下旬～8月下旬の薬剤散布。	
うどんこ病	7月上旬～8月下旬の薬剤散布。	
つる割病	定植前の土壌消毒。	長期連作を前提とした栽培体系を改める。抵抗性品種・台木の利用、太陽熱処理などを含む総合的な対策を講じる。
つる枯病	6月上旬～8月下旬の薬剤散布。	
アブラムシ類	植付時の粒剤施用。発生初期からの薬剤散布。	
ハダニ類	発生初期からの薬剤散布。	
ハモグリハエ類	植付時の粒剤施用。発生初期からの薬剤散布。	
ウリノメイガ	発生初期からの薬剤散布。	

作物名 ビーマン

項目	実施のポイント	備考
灰色かび病	薬剤散布。被害果を除去する。	シカルホキシミド系剤、シエトフェンカルブ・チオファネートメチル剤耐性菌が確認されているので、ローテーション散布を実施する。
菌核病	薬剤散布。	
うどんこ病	薬剤散布。	
ハダニ類	薬剤散布。	
アザミウマ類	発生初期からの薬剤散布。	アザミウマの寄生していない苗を移植する。冬季にビニールを除去し、ミカンキロアザミウマの定着を阻止する。
アブラムシ類	定植時粒剤施用。発生初期からの薬剤散布。	ウイルス病を伝搬するので、防除を徹底する。

## 参考文献

- 1)農業技術体系 . 第 4 卷 . p107-109
- 2)田中明・早川嘉彦(1975). 耐酸性の作物種間差 第2報 耐酸性の種間差 . 日本土壤肥料学雑誌 . 第 46 卷 . p26-32
- 3)相馬暁(1986) . 北海道における野菜栽培畑土壌の現状と各種野菜の特性に対応した肥培管理法 . 道立農試報告 . 第 56 号 . p1-126
- 4)川出武夫ら(1970) . 土壌水分の差違とそ菜の生育に関する研究 第1報 土壌水分の差違が秋冬作そ菜類の生育および影響 . 東海近畿農試研究報告 . 第 20 号 . p15-40
- 5)籠橋悟ら(1970) . 水田導入そ菜の生育におよぼす土壌通気および土塊の大きさの影響に関する研究 . 東海近畿農試研究報告 . 第 20 号 . p100-122
- 6)渡辺和之(1976) . 水田転換畑における作物栽培 . 東北農業研究 . 22 . p38-59
- 7)千葉県農試(1975) . 千葉県農試特別報告 . 第 6 号
- 8)幸田浩俊 (1983) . 野菜類と普通作物による低湿地帯の田畑輪換栽培に関する研究 第1報 地下水位が作物の生育・収量、作土層の水分吸引圧・気相率および土壌養分の動態に及ぼす影響 . 茨城県農試研究報告 . 22 . p25-64 .
- 9)平成 7 年普及奨励および指導参考事項 . 北海道農政部 . p269-272
- 10)北海道施肥ガイド . 北海道農政部
- 11)平成3年普及奨励および指導参考事項 . 北海道農政部 . p377-379